

## 8時間コース

日 時：（前半）平成13年6月7日、（後半）同月8日

参加委員：（前半）浅井平三、朝倉淳也、井口敬明、尾本太郎、久連山陽子、塩谷久仁子、関口佳織、高橋邦明、只野靖、中野剛、西岡文博、日置雅晴、向井惣太郎、最上健太郎、大川淳子、佐藤光子（札幌弁護士会）

（後半）浅井平三、朝倉淳也、尾本太郎、久連山陽子、塩谷久仁子、関口佳織、高橋邦明、只野靖、中野剛、大川淳子、佐藤光子（札幌弁護士会）

報告者：大川淳子

礼文島西海岸を南北に踏襲する散策コースは、「8時間コース」と呼ばれ、礼文島の散策コースの中で最も長いコースである。8時間コースは、海岸から、草原、森林と礼文島の様々な自然環境を満喫できるため、当然、多種の植物を観察することができる。当初は、8時間コースを一日で踏襲する予定であったが、時間及び体力的なゆとりを考慮し、現地で急遽二日に分けて調査することとなった。

（前半）

7日午後1時頃、礼文島の最北端である須古頓岬にて記念撮影をした後、8時間コースへと出発した。須古頓岬付近の観光客らによる賑わいを過ぎて細い車道へ入るころから、早くも道の両端に白や黄、紫の花々が咲いていた。小さな白い花が集まって一つの大きな花のように咲いているセリ科の花（主にオオカサモチと思われる。）及び紫色の可憐なチシマフウロは、前半のコースではほぼ途切れることなく咲いていた。ところどころに、黄色いセンダイハギやエゾカンバイが咲いており、黄色い色がポイントとなって花畑に華やかさを与えていた。

しばらくすると、ゴロタ山へ登る上り坂となった。その坂を登り切ったところがゴロタ山の頂上で、礼文島の北部を見渡せる絶好の展望台となっていたため、そこで最初の休憩をとった。休憩の間にこれまでに観察した花の名前をチェックしたが、図鑑と実際の花を照合させるのはなかなか難しく、花の色や形だけではなく、葉の形や花や葉の付き方等が観察の上で重要であることを知った。

ゴロタ山の頂上を後にし、稜線を下ってゴロタノ浜へ出た。海岸沿いを歩く脇にはハマナスが咲いていた。山側には、ただの草原に見えるところを柵で囲ってある場所があった。その場所がレブンアツモリソウの生息地に近いこともあって、柵で囲われている場所はレブンアツモリソウの保護区ではないかと花を探したが、残念ながらそれらしきものは発見できなかった。

礼文島の西側の漁村である鉄府でトイレ休憩の後、前半の最終目的地である澄海岬へ向けて最後の山越えとなった。岬の上からの眺めは、ところどころに咲くきれいな花々と、険しい崖にぶつかる荒々しい波とが重なりあって、礼文島の特徴を表す景色だった。最後の下りは、風の通り道だったためか、8時間コースの中でもっとも風の強い場所を過ぎ、澄海岬へと降りていった。午後4時半頃、澄海岬にて、8時間コース前半を終了する。

(後半)

8時間コース後半を開始する前に、澄海岬近くのレブンアツモリソウの群生地へ立ち寄った。レブンアツモリソウのシーズンは、従来、6月の前半とのことであり、我々が調査にいった時期がピークのはずであった。しかし、今年は、5月に暖かい日が続いたため、花の時期が2週間程早まっているとのことであり、レブンアツモリソウも、すでにシーズン終わりであった。そのため、多くの花についてはすでに咲いた後の茶色い花弁が残っているだけであったが、わずかに、白い凜とした花を咲かせている株が残っていた。群生地は、保護のために中に入れないように柵で囲われており、観察用の短いコースを除いては、花の近くには近づけなかったが、自生の株が残されているのを観察することができた。

9時20分頃、澄海岬を出発し、8時間コースの後半を開始した。花の種類がコース前半に見られたものとは異なり、ネムロシオガマ、レブンシオガマ、チシマゲンゲ、レブンソウ、ミヤマオダマキといった花々が多く見られるようになった。少しピッチを早めて緩い上り坂を進んでいった後、今後コースを引き返せなくなるポイントで、その旨の確認があり、皆覚悟を決めて先へ進んだ。草原の中をしばらく行くと、柵だらけの一画があった。防風柵との説明書があり、強風から植物を守って育成しているようであった。この一体は、山火事で森林だったところが草原になってしまったとのことであり、以前の森に戻そうとしているのだと思われる。

また、しばらく先に進むと、森の中へ入った。森林の地域は、原生林として保護されているとのことであり、その旨の標識も見られた。近くで水が流れる音も聞こえ、同じ礼文島の中なのかと思われるほど、それまで歩いてきた草原や海岸の雰囲気と異なっていた。山奥の中を歩いている感覚である。そうかと思うと、背の高い草原の中に出たりと、植生が、めまぐるしく変化した。風が弱い場所では、風を避けてきたと思われる異常な数の虫が飛んでいたため、風の強いところで、軽く休憩をとって先へ進んだ。

12時頃、禿げ山の頂上へ到着する。名前の通り、頂上は、だだっ広く何も生えていなかった。曇りがちな天候だったため、周囲を見渡すことはできなかったが、眼下に海が見え、海が近いことを実感した。禿げ山の頂上からは、海岸への下り坂が続いた。途中、レブンウスユキソウが、ひっそりと咲いているのに遭遇する。また、急な下り坂の途中に、色とりどりの花が咲き広がる光景が何度かあったが、視界を遮るものがないため非常に美しかった。

下りきったところで礼文島の西海岸に出た。波の音を聴きながら、海岸沿いをしばらく歩いた。岩だらけで何も栄養がないように見える所でも、はいばるように植物が生えて花を咲かせており、その生命力には驚くばかりであった。天候が悪いときには、波が高くてこの海外沿いを歩くのを断念せざるを得ないとのことであるが、今回は運良く波も比較的穏やかで、無事、波をかぶることもなく、海岸沿いを歩ききり、宇遠内に到着した。

8時間コースは、本来宇遠内からさらに礼文島の南端へと続いていたのであるが、かかるコースは非常に危険とのことで現在は封鎖されており、その代わりに、宇遠内から島の内側に入り、山を越えて礼文林道へ出るコースとなっていた。

8時間コースも残り僅かと礼文林道への道を進んでいったところで、期待以上に多くの花々に出会えた。まずは、ヒオウギアヤメ。小さめの紫のアヤメが、一帯に咲いていた。その脇に、スズランの群生地があった。野生のスズランをこんなにも多く見たのは初めてである。その先の山道には、濃いピンク色のオオタカネバラが何カ所かに咲いていた。野生のバラらしく、上品ながらも素朴な雰囲気がある。その更に先に、大きな木に大きな葉、大きな白い花をつけて良い香りを放っていた木があったのだが、結局名前は判明しなかった。あの花の名前は何だろうと話しているうちに、見覚えのある礼文林道へ到着。午後4時20分頃、8時間コース後半を無事終了する。

後に歩いた短い散策コースでは、礼文島のある地域しか観察できなかったが、8時間コースを歩いたことによって、島全体の自然を観察することができたと思う。歩き終わった後、8時間コースを2日に分けて歩いたことにより、コース途中で出会った花々をゆっくりと観察することもでき、1日で踏襲しなくて本当によかったと思った。

以上